# 普 及 技 術 概 要 書

| ヒメジャコのケージ養殖技術 | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 〔要約〕ヒメジャコの集約的養殖手法を開発するために、ヒレジャコ用ケージ底面部の構造を改良し、養殖試験を行った。その結果、コンクリート板もしくは20mmバラスを底面部に敷く手法で養殖が可能となった。 | | | | | | | |
| 実施機関 | 水産試験場　八重山支場 | | 連絡先 | 09808－8－2255 | | | |
| 部会名 | 水産 | 専門 | 養　殖 | 対　象 | ヒメジャコ | 分類 | 指　導 |

［背景・ねらい］

ヒメジャコは、埋め込み手法による養殖技術は確立されているが、より集約的な手法が必要である。ヒレジャコで確立されていたケージ手法でヒメジャコを養殖すると生残率が悪かった。そこで、ヒメジャコの平均殻長８mm種苗のケージ養殖技術を確立するためにケージ内底面部の材質に検討を加えた。

［成果の内容・特徴］

①ケージは金網で底面部を補強し、ネトロンネットで内張りを施した。底面部は、仕切としてネトロンネットを底面に敷くヒレジャコ方式の他、浜バラス、市販のバラス(10mm・20mm・40mm)及び５cm厚のコンクリート板を底面に敷いた。コンクリート板は作成時に多数の溝で表面に凹凸を作り、水抜き穴をあけた（図１）。

②８mm種苗の収容密度は全試験区800個体/m²とし、底面部材質の異なる６区で１年間(364日間)試験を行った。

③底面部の材質によって生残率に大きな差が出た。コンクリート板区76％、20mmバラス区55％、浜バラス区42％、10mmバラス区31％、ネトロンネット仕切区21％、40mmバラス区４％の順であった（図２）。

④成長の差は、生残率ほど大きくなかった。40mmバラス区は平均殻長30mmで最大であったが、これは小型個体がバラスの隙間に埋没して早期(95日)に死亡し、生残した大型個体30個体の平均値が大きくなったためであると推察された（図３）。

⑤総合的に判断するとコンクリート板(生残率76％、平均殻長24mm、生残密度608個体/m²)と20mmバラス(生残率55％、平均殻長28mm、生残密度442個体/m²)が底面部材質として優れていると判断された（図２、３）。

［成果の活用面・留意点］

①ヒメジャコ配布種苗(殻長８mm)からのケージ養殖が可能となった。

②コンクリート板を作成、設置するのに比較して20mmバラスの方が作業上は楽である。

③材料費はケージ本体（１×２ｍ）が15,000円、１m²コンクリート板が700円、１m²分(50kg)20mmバラスが20円であった。

④ケージの設置、網掃除、密度調整等の管理手法はヒレジャコと同様である。

【具体的データ】

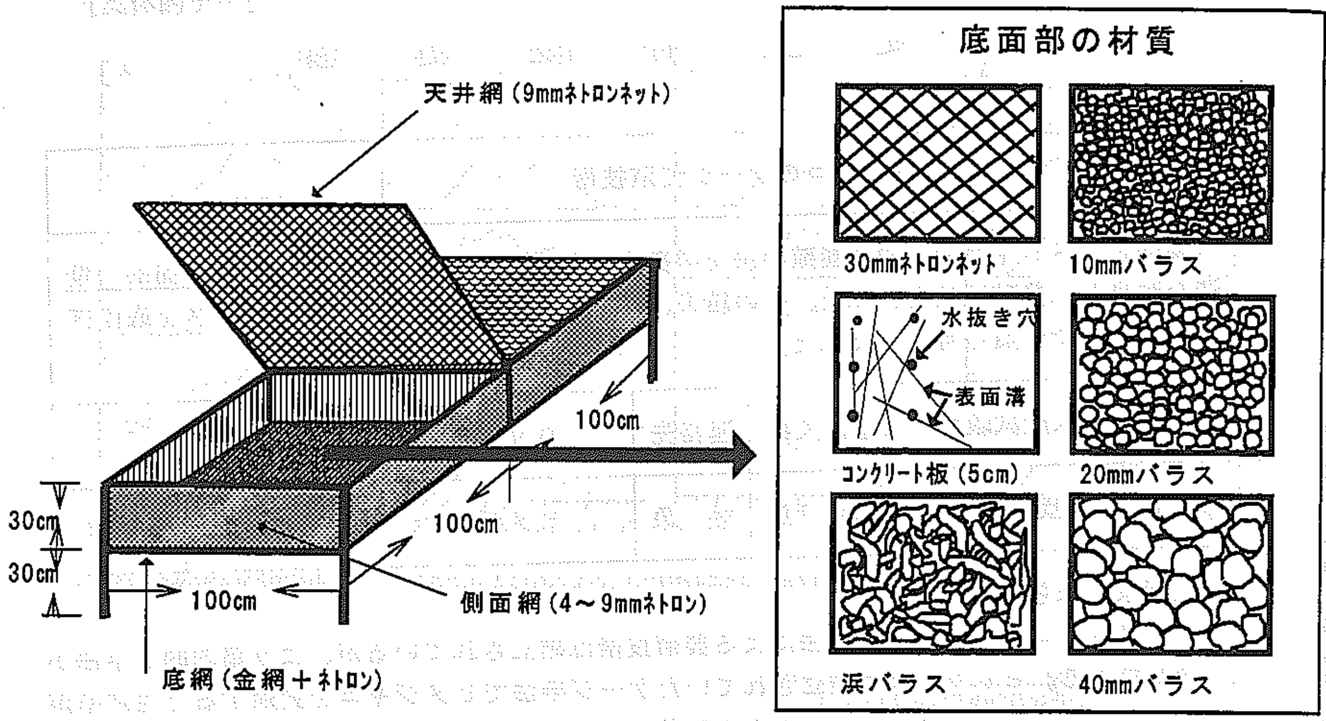


図１　ヒメジャコ養殖ケージの模式図

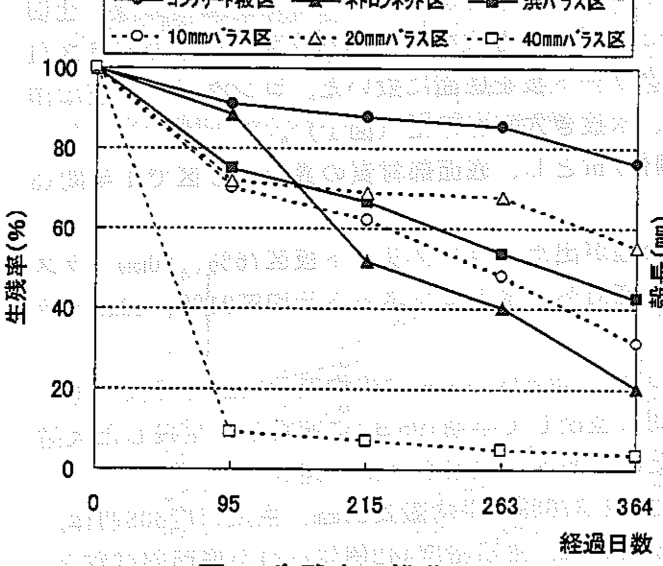


図2 生残率の推移

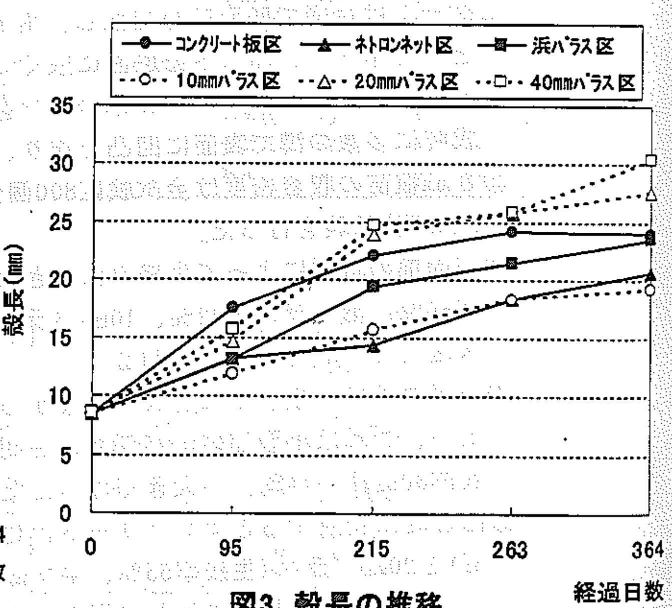


図3 殻長の推移

【その他】
研究課題名：ヒレナシジャコの増養殖試験
予算区分：県単
研究期間：平成 12 年度（平成 11 年～ 12 年）
研究担当者：玉城　信、呉屋秀夫、岩井憲司
発表論文等：平成 11 年度沖縄県水産試験場事業報告書（掲載予定）